

道徳

「しかられて」の授業を通して見た児童の変容

三重小学校教諭 河内 忠之

1 はじめに

道徳の指導は、速効性すなわち、みかけの行動の改善にばかり結果があらわれるような形式的なものであってはいけないといわれている。その方法では、児童ひとりひとりの自覚を促すことはとうていできないし、とうぜん成果があがったとはいえないと思う。

一時間の授業を契機として、自他の行動について新しい見方、考え方をとることができるようになったり、理解したことをさらに深めたり、進んでの実践を重ねることによって、児童ひとりひとりのものにさせることが、望ましい道徳指導のあり方だと考える。

しかし、一方では、そんな遠い将来の成果を期待するのは、逃げの口実であり、もっと一時間一時間の成果をねらうべきだと反論にもうなづけるものがないではない。

もちろん、遠い将来に期待をよせてといっても、その時間に何の効果も期待せずして、授業を行なうものはいないであろう。

指導にあたっては、やはり両者の考えをとり入れて、その時間のねらいは、実践しようという意欲づけ（態度化）までにとどめ、その実践活動は将来（遠い将来とは限らない）に期待しようという考えが、もっともよいものだと考え、これまでも指導してきた。

たとえば、その意欲づけをねらった指導が、たったひとりの児童の知識を広めただけであってもよい。それが、たったひとりの児童の理解を深めただけであってもしかたがない。たったひとりの児童の心情を変化させるだけの力しかなかったとしても、近い将来、この指導が児童の行動のいしづえとなってくれることを願って授業にあたっているのである。

それゆえ、ここにあげたものは、皆様からごらんになると、何のへんてつもない授業の記録かもしれませぬ。皆様のご指導をいただきたく、あえて発表いたしました。

2 授業をするにあたっての仮説

- (1) 1時間の授業でも、児童の意識を変容させることができる。

意識が変容したかどうかを評価することは、むずかしいと思われるが、何らかの方法によってつかむことができれば、1時間の授業でも、必ずや意識は変容していることが明らかにされるものと思う。

- (2) 意識の変容を評価するものとして、重要な発問のつど記録させる方法や、日記による方法が可能と考える。

発問のつど表記させることは、意識を表現するというむずかしさはあるが、各人の意識のあとをたどるには、かっこうの資料と思う。また、日記であるが、一時間の授業によって内面的な変化があったからこそ、その日の材料にとり上げられるのだと考えたからである。単なる知識・理解に止まっているだけならば、きっと日記の材料に道徳時間の学習がとりあげられることはない

であろう。

- (3) 児童は、父母に感謝し、尊敬する心をもっている。

しかし、その気持ちは心の底にあって、他のものにかくされてしまうほど意識がうすく、本人も気づかぬ面があると思う。

そこで、道徳の時間に扱うことによって、そのかくされた意識を明確化し、情緒を変化させることによって、内面化させることができると思う。

断絶の世代とかいうことばの流行するこのごろではあるが、それは親の側に立ってのことばであって、もっとそれを解決しようとするために努力しない、親の方にこそ責任があるのではないだろうか。

- (4) 資料「しかられて」(新しい生活P101)によって、価値をとらえさせることができる。

ふだんおこってばかりいるおかあさんも、ぼくたちのことを心から考えてくれているのだという。また、ぼくたちの側からみれば満足のいかない点も、みんなのために働くいそがしさに原因があるのだという、相手の立場にたつてものを考えること。さらに、相手の立場を理解して、進んで手伝おうという意欲をもたせるのには、身近かな、ごくありふれた事件をとり上げたものだけに、とても親しみやすく、共感をもたせることができ、とてもふさわしいと考える。

3. 授業の実際

- (1) 授業案

ア 主題名 しかられて

イ 主題設定の理由

核家族化などということばが流行しだしてからか、最近、親子の話し合いの場やふれ合いの場が少なく、親と子の間に深い溝がはいってしまったような家庭が多いことを、ニュースなどでよく耳にする。また、それらが原因で事件が起きていることも数多く報道されている。ほんとうに、親子の間がはなれてしまったのだろうか。児童は、そんなに親を信頼、尊敬することができなくなってしまったのだろうか。

その実態をとらえるとともに、資料「しかられて」をとり上げて、親のありがたさを実感としてとらえさせようと考えて、この主題を設定した。

ウ ねらい

家族のものが互いに愛情をもち、家庭の一員としての自覚をもって、明るく楽しい家庭をつくりあげようとする心情を養う。

エ 資料選択の理由と利用の観点

児童の中には、家庭のしあわせを経済的なものにばかり求めるものが多い。だから、いろいろと品物を買ってくれるから、母親は好きだとか、その反対に、ねだっても買ってくれないから嫌いだなどということ言う。両親の、ほんとうの心までは、もちろん考えたことは数少ないであろう。いや、まったくないといえるかもしれない。

また、児童の生活を見ると、この資料にあるような、きょうだいげんかは、ごくあたりまえのできごとである。その、ありふれた「けんか」をテーマにしたこの資料は、児童にその主人

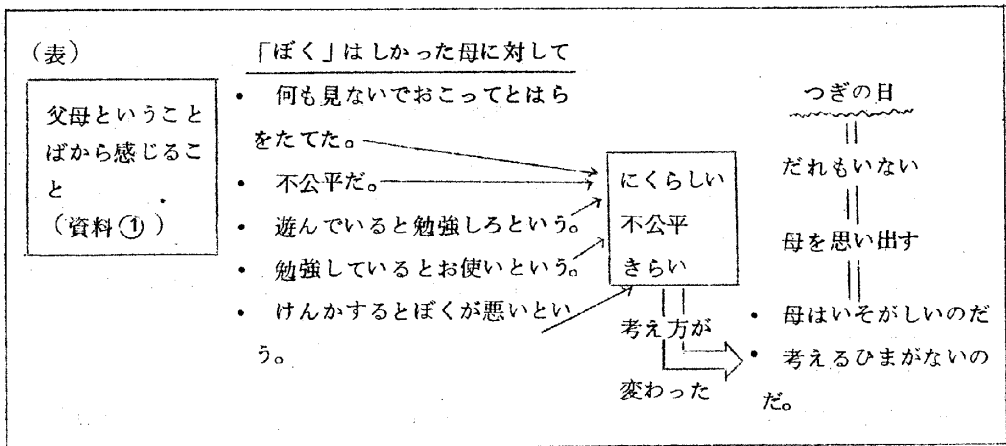
公の心情を理解させることは容易である。それどころか、主人公即自分という一体感をもって考えることができ、しんけんな学習ぶりも期待できる。

資料の中の「ぼくばかりしかる母に対して不公平を怒るべく」に共感させ、それが、母の出かけたあとのさびしい中で、自己を反省し、母の立場を考えるべくにまで心が変わる過程をじゅうぶんに考えさせ、母親（ここでは両親のうち、とくに母親）のありがたさに気づかせたい。

オ 展 開（主要部分のみ）

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 調査の結果について話し合う。</p> <p>父母に対して、自分たちはふだんどのよう に思っているか。 (資料①をつかって)</p> <p>2 読み物「しかられて」を読み、話し合う。</p> <p>① 「ぼく」は、しかる母に対してどのよ うな気持ちになりましたか。また、母をどう 思っていますか。</p> <p>② あなたが「ぼく」だったら、どういう気 持ちになったでしょう。</p> <p>③ どうして、急にさびしくなってしまった のだろう。そのとき、なぜおかあさんのこ とを思いだしたのだろう。</p> <p>④ 「にくらしい」と思っていた、おかあさ んに対する気持ちがどう変わったか。</p> <p>⑤ このあと、「ぼく」は、母や弟に対して どのような態度をとるようになるか考える。</p> <p>3 録音「おかあさんの骨をもらって歩けた」 を聞かせる。</p>	<p>1 事前に、「父母」ということばから何を思 い出しますかという調査をしておく。父母の 批判のみに終わっている児童に対しては、 「自分の方にも何か悪いところはないだろ うか。」というように、反省の目をむけるよう にさせておきたい。</p> <p>2 母の考え「あなたはにいさんで、正二は小 さいのですよ。」とぼくの考え「公平にしてほ しい。」について、話し合わせる。</p> <p>考えれば考えるほど、はらがたってきた点 をしっかりおさえておきたい。</p> <p>②について、記録させ、資料とする。(資料②)</p> <p>③について記録させる。(資料③)</p> <p>わがままな弟だがないとさびしいし、迎 えてくれる母がないとやるせないことに気 づかせたい。</p> <p>「自分が悪いとは思わないが、母の立場も考 えてみた「ぼく」の反省する態度に共感させ たい。</p> <p>⑤について、記録させる。(資料④)</p> <p>もっと話し合う機会をもつだろう。行動に は不公平に見えるが、ほんとうはふたりの子 どもを平等にかわいがっていてくれることを 理解していこうと想像させたい。</p>

カ 予想される板書



4 結果とその分析

(1) 仮説(1)について

○ S・M(女児)

ア 指導前のある日記から

きょう、弟とけんかをした。わたしは弟に小刀をとられてしまった。父はおこり、わたしばかりせめる。わたしは、ふとんにもぐってもそのことがわすれられなくて、なみだをながしてしまった。

イ 「父母」ということばからの連想(資料①から)

父母はすぐおこる。きらいだ。

ウ 本時の記録から(資料②～④から)

母はかってすぎる。→おこるおかあさんがいなくて、シーンとしているから、おかあさんのことを思い出した。→弟のめんどろをみたり、すぐ勉強したり、お使いに行ったりするだろう。

○ H・S児(男児)

ア 本時の記録から

父母はあまい、やさしい、ねだることができる。しかし、すぐおこるのできらいなことがある。とてもおっかない。→気がすむまで弟をなぐってやりたい。→きのういいあったことがわすれられなくて、母のことなど考えてみたりして、母の立場がわかってそれでさびしい。→母はいそがしいのだから、せわをかけたりにしないできちんとするだろう。

○ N・K児(男児)

ア 本時の記録から

父母には長生きしてもらいたいと思う→おこった母がにくらしい→やっぱりおこられたりしたり、あまえたりしてみたいから、どうしても母を思い出す→何でも、ハイ

ハイとはできないが、よろこんでやってやりたいという気持ちになるだろう。

S・M児のは、授業以前のものと大差なく、かなり観念的である。いわゆる理解しているというだけのタイプといえる。しかし、H・S児のものになると、いつもわずれものをして、母にめんどろをかけている自分と比較して考えているあたり、価値を理解するという域を脱しているといえよう。さらに、N・K児になると、もっと高度なところまで変化があったとみられる。「何でもハイハイとはできないが」という表現には、この児童のほんとうの姿があらわれていると思う。この努力しようという姿勢こそ、この時間でねらったものといえよう。

こうみてくると、この時間にかぎり、1時間の授業でも児童の意識を変容させることが可能だといえることができる。

(2) 仮説(2)について

仮説(3)と(4)を述べるのに使用している資料をごらんになればおわかりいただけると思うが、児童に記録をさせる方法でも、ある程度の評価は可能である。しかし、これは前述のとおり、表現にむずかしさがあるので、およその傾向をつかむというためのもので、細かな点は、やはり個人面接等による方法をとらなければならないと思う。

なお、日記については、次のものをごらんになれば、評価の材料として適切であることが、理解いただけるものと思う。

○ A・S児

……こんどは、わたしがその立場だったらと考えてみた。ひとりが悪くてけんかになるだろうか。ふたりが悪いからこそ、けんかになるのだと思う。だからこの場合、しかられてもしたくないだろう。それに母はいつもいそがしいのだから。

とくに、わたしの家みたく、家庭のことも、事務の仕事も両方やらなくてはならない。わたしも少しぐらい進んで手伝ってやらなければいけないと思った。それに、母だからこそいけないことをしかったりするのだ。よそのおばさんはしかったりしない。子どもがかわいいからしかるのだろう。母に感謝しなければならないことが、山ほどでてきた。なるべく、母のことを考えて、家のことを考えて、よろこんで進んで、感謝の気持ちで手伝ってやりたい。「毎日、わたしたちのことを家庭のことを考えてくれるおかあさん、ありがとう。」とさげびたい。そして、わたしもおとなになったら、おかあさんみたいになりたい。

○ O・M児(女児)

……わたしは、読んでいるとき、経験あることなので「ぼく」の気持ちがよくわかるような気がした。家へ帰って顔を見せるだけですぐならみあい、ちょっとさわったくらいではたきっこ。この本にでているよりもひどいけんかです。

前だって、つまらないのでマットレスで遊んでいたら、おにいちゃんが来て「こういうのできるかい。」と言ってやるので、まねをしてやると「へたくそ。」とすぐ言うのです。なのでわたしも、「しようがないがね。はじめてなんだもん。」と口ごたえするともうけんか。そこへ、おかあさんがでてきて、「はじめから、そんなことやらなければいいんだよ。」というのです。そして、先に手を出したのがわたしということになってしまい、いつもそんをします。それに、わ

たしがおかあさんの立場だったら、泣いてしまうだろうと思います。いってもきかないからです……
 ……わたしのおかあさんは、やさしすぎると人はいうけれど、わたしはこれでもいいと思います。

(3) 仮説(3)について

「あなたは、父母ということばから何を思いますか。」の発問により、自由に表記させたものを
 まとめてみた。

資料①

1	父母はすぐおこる。きらい。こわいと思う。	……………	のべ17名
2	わたしのため家のためにつくしている。 毎日、会社で働き、つかれた顔をして帰ってくる。	……………	16
3	父母に感謝している。大きくなったら父母のせわをしなくては、 恩をかえさなくては。	……………	10
4	とてもあまい。やさしい。ねだることができる。	……………	6
5	いないと、とてもさびしい。	……………	4
6	その他 父母しかしかってくれない。 あたたかいように感じる。		

この結果は、書かれた内容を同一人のもので項目に分けたため、イが多く、そのようにばかり
 考えていると誤解されそうであるが、実際は、「こわいと思うこともあるが、いつもはとても
 やさしいと思う。」というような書き方がとられているのである。

このように、児童は、よく「いなくなっちゃえばよい。」とか「うるさく言ってきらいだ。」など
 と口にしてはいるが、心の底では、父母に対してありがたいと感謝し、いなければさびしいと思っ
 ているのである。

しかし、そういう気持ちをもつものは、静かにものを考えてみることで、しかられたり、遊び
 にむちゅうになっているときは、そうとは言いきれない。そのような状態のときには、父母に感
 謝する意識は、どこかへ追いやられてしまっているのだと思う。このことは、資料②「あなたが
 ぼくだったら、きっとどう思っただろう。」の結果にもはっきりと表われている。

資料②「あなたがぼくだったら、きっとどう思っただろう」

1	母がにくらしいなどにくらしいということばを書いたもの	……………	のべ18名
2	くやしい	……………	8
3	はらがたつ	……………	5
4	おかあさんなんかどっかへ行っちゃえ	……………	5
5	その他 数は少ないが注目すべきことは多々ある。		
	<ul style="list-style-type: none"> • ぼくのことは、かわいくないんだ。ぼくはきらいで弟が好きなんだ。 • おかあさんなんか死んでしまえ。 • 弟がいなければいい。 		

- 家出して心配させてやる。
- 気がすむまで弟をぶんなぐってやりたいなど。

このように、児童は、ばくぜんとしてではあるが、父母を尊敬し感謝するという意識をもって
いるのであるから、道徳の時間でとり上げて扱うということは、意識を明らかにさせることか
ら、大いに意味ある、たいせつなことだと考える。

(4) 仮説(4)について

主人公の気持ち、みんなのために働いてくれる母へ感謝し、自分もそれを理解してやらな
ければ変化しているのをどの程度、児童がとらえているのか調査してみた。

ア 自分がしかられた「ぼく」だったら、どういう気持ちになるだろうか。

(前述、資料②を参照)

イ 「どうして、さびしくなったとき、おかあさんを思い出したのだろうか。」 資料③

- | | | |
|---|--|------|
| 1 | 話すこともできないし、おやつをよけいももらうこともできないから …… | のべ5名 |
| 2 | おかあさんがいないと、やっぱりつまらないから …… | 3 |
| 3 | 5時に帰ってくるといっているが、帰ってこないかもしれないから …… | 2 |
| 4 | いくらおこられても母がすきだから …… | 2 |
| 5 | 心の底ではおかあさんがすきだから。いつもはいやだけど、やっぱりおかあさんがす
きだ。だから、いないとおかあさんのことばかり考えている。 | |
| 6 | おせんべいなど置いていってくれたのは、ぼくのことを思っていてくれるのだなあ
と、思っている。 | |
| 7 | いつもけんかしたり、おこられたり、家の中は何かしら音がしているけれども、だれ
もいないと音がなくてさびしいから。 | |
| 8 | 弟がいるとすずんのじゃまになると考えて、母は連れて行った。そこまで考えて
くれるのだからありがたい。 | |
| 9 | 急にわたしからはなれていってしまったようでさびしい。 | |

ウ 「ぼくはこのあと、母や弟に対して、どのような態度をとるようになると思いますか。」

資料④

- | | | |
|---|--|------|
| 1 | 弟のめんどろをみたり、すぐ勉強したりお使いに行ったりするだろう。 …… | のべ4名 |
| 2 | 母や弟のことも考えて、すなおになると思う。 …… | 3 |
| 3 | おかあさんに少しでも役に立つことをしてやりたい。 …… | 3 |
| 4 | めいわくをかけたり、口ごたえをしったりしないようになる。 …… | 3 |
| 5 | おかあさんはいそがしいのだからと、せわをかけない。 …… | 3 |
| 6 | おかあさんもぼくのことを考えてくれているのだから、弟と仲よくしておかあさんの
いう | |

ことをさく。 2
7 何でもハイハイとはできないが、よろこんでやってやりたい気持ちになる。 1
8 もっと自分のことを考え、おかあさんのことも考えるだろう。 1

このようになっているが、クラス全体を総体的に見ると、母親に対する反抗

母親に対する反抗・不満の気持ち やっぱりおかあさんがいないと、さびしくてつまらない
 もっとおかあさんの立場も考えて、おかあさんの手伝いをしようという方向にむかっている。

おかあさんの立場を考えて、おかあさんの手伝いをしようとは、おかあさんが家のため、みんなのために働いていることを知って感謝の気持ちをもつということである。また、手伝うということは、家のために働こうということにほかならない。

このように、この資料「しかれて」で、価値をとらえさせることができる。

5 おわりに

1時間の授業で、児童がこのように変容するのだという意味でここにとりあげたのではない。1時間の授業でもかなりの変容が期待できるのだということ、さらに、それを評価することもある程度可能だということ、少しでも明らかにしてみたかったからである。

しかし、1時間の授業での効果は、そう多くのものを望むことはできない。ここに、あらためて1時間1時間の授業の積み重ねがいかにたいせつかを痛感した。

なお、この授業をするにあたり、文部省からの各図書ほかに、「確かな学力を身につける授業(宇大附小)、道徳教育と評価(光風出版)、学校教育全書 15 道徳(全国教育図書)、道徳教育 93(明治図書)を参考にした。

評

道徳性についての評価はたいへんむずかしいことであると考えられ(実際にむずかしいことではあるが)、そのために研究することさえ少なかったのが現状ではなかったろうか。このようなときに道徳時間の指導の評価—特に児童の道徳意識の変容についての研究がなされたことはきわめて意義のあることと思う。この研究により意識の変容が可能であろうということを確かめたことは、とりもなおさず、道徳時間の存在の意義を再確認することに通ずるのではないかと考えられるからである。このような意味で、この種の実践記録などが多くの先生方の手によって積み重ねられることがたいせつであろうと思う。変容をとらえる方法については、この記録にある方法のほかに、中高学年では道徳ノートの活用も考えられるが、この点、筆者はじめみなさんと研究したいものである。なお筆者はここ数年来道徳教育研究に鋭意力を注がれておられるが、さすがに仮説(3)にみられるように、断絶の世といわれる時にも、人間信頼の信念にたって指導を行なおうとし、またそれをなりたせたことは、道徳教育を行なうものにとって、銘すべきことであろう。